

福岡大学 医学会ニュース

No. 44

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

学部長就任にあたって

医学部長

満留 昭久



この十二月から池原前学部長のあとを継ぎまして、医学部長の任にあたることになりました。この数年医学教育は全国的に改革の大きなうねりのなかであり、また大学、医学部も国立大学の独立行政法人化とそれに伴う統廃合の動きを中心大きく変わろうとしています。このような状況の中でわが福岡大学医学部・病院も将来の方向性を明確にし、これまでの既成概念にと

らわれない変革を遂行する必要性は皆さん痛感されておられることと思っております。このような中で学部長の任にあたることは私にとつてたいへんな重荷となっております。しかし皆さんの衆知を結集して福岡大学医学部・病院の存在意義を世に示したいと思っておりますので、ご指導、ご協力をお願いいたします。

さいわい池原前学部長、小野前教務委員のもとで教育改

革と講座制の再検討などに向けてレールを敷いていただきました。医学教育については(1)短期集中型の臓器機能別統合講義、(2)チュートリアル式学習法、(3)OSCE、(4)グループワークなどが導入されてきました。

OSCEの導入、(3)M-1のカリキュラムの再検討など考えていかなければならないと考えております。教育とは「学生の意識を変えること、意識を変えて彼らの行動を変えることである」といわれております。カリキュラムを改善していくことはもちろん重要なことではあります。教育や学生への対応について私ども自身の意識を変え、行動を変えることも

これらの改革は平成十四年四月から実施されます。今後基礎系講座の再編を含めた改革はさらに検討して進めていかなければならないと思われ

今後にはさらにこれらをおし進めるとともに、(1)BSLにおけるグループワークの徹底、(2)BSLの評価として

OSCEの導入、(3)M-1のカリキュラムの再検討など考えていかなければならないと考えております。教育とは「学生の意識を変えること、意識を変えて彼らの行動を変えることである」といわれております。カリキュラムを改善していくことはもちろん重要なことではあります。教育や学生への対応について私ども自身の意識を変え、行動を変えることも

これらの改革は平成十四年四月から実施されます。今後基礎系講座の再編を含めた改革はさらに検討して進めていかなければならないと思われ

これらの改革は平成十四年四月から実施されます。今後基礎系講座の再編を含めた改革はさらに検討して進めていかなければならないと思われ

福岡大学医学部・病院創立三十周年記念行事開催にあたって

実行委員長

岡崎 正敏



福岡大学医学部・病院も開設以来、早三十年を迎えることとなりました。今年の卒業生は四半世紀の区切りとなる第二十五回生ということになります。

福岡大学医学部が主体に運営いたしますが、福岡大学病院、福岡大学医学部同窓会の協賛のもと三位一体となった行事です。

射線科、福島(脳外科)、二見(筑紫・外科)、船越(医学部事務)、松本(医学部同窓会、山下(第二外科)の各氏が就任し、平成十三年九月より準備に着手しています。

市川先生御自身が共同開発された胃二重造影法を駆使され、世界三十五ヶ国を股にか

卒業生は二千六百二十名を数え、国内・外で指導的立場の方も散見されるようになって参りました。二十五年の歳

卒業生は二千六百二十名を数え、国内・外で指導的立場の方も散見されるようになって参りました。二十五年の歳

卒業生は二千六百二十名を数え、国内・外で指導的立場の方も散見されるようになって参りました。二十五年の歳

卒業生は二千六百二十名を数え、国内・外で指導的立場の方も散見されるようになって参りました。二十五年の歳

福岡大学医学部・病院創立30周年

「福岡大学医学部・病院・同窓会21世紀への旅立ち」

日時 平成14年10月12日(土)
場所 アクロス福岡および福岡国際ホール

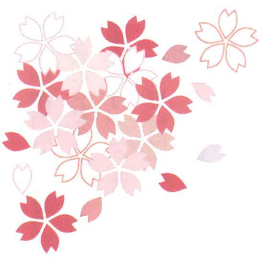
主な目的としていますが、患者さんを含めた一般市民の方々の日頃のご厚情に報いるため、シンポジウム形式の市民公開講座も併せて開催いたします。

特別講演は、国立がんセンター1名譽院長・市川平三郎先生に「日本医療の世界への発信」と題して御講演いただきます。

市川先生御自身が共同開発された胃二重造影法を駆使され、世界三十五ヶ国を股にか

「福岡大学医学部・病院・同窓会21世紀への旅立ち」

日時 平成14年10月12日(土)
場所 アクロス福岡および福岡国際ホール



新病院長としての抱負

福岡大学病院院長

白 日 高 歩



近年しきりに医療の世界におけるビッグバン現象が囁かれていた。一昨年の正月テレビで見えた米国医療のグローバル化戦略は資本主義先進国の医療への考え方の一端を示すもので驚異の目で見えた。米国有数の幾つかの大病院が、ドナー不足で収入が減少してきた移植医療をアジアに展開しようとする戦略であった。臓器移植に抵抗の少ない国

をターゲットに幾つかの拠点病院をつくり、いながらにして米本土と同じ移植手術をその場で受けられると言いたい文句のようであった。上海、タイなどの名前が出ていたように記憶する。翻って我が国では昨年末より、破綻に瀕しつつある医療財政を立て直しの為政府が色んな施策を打ち出した。その一つに株式会社を病院経営に参画

させるといふ、以前では想像すら出来なかったような提案が含まれていた。他の職種と同様な競争原理の導入を促す内容と理解した。私立医大病院として我々がこのような状況を無視することは不可能な事であり、現時点では最も敏感にこれに反応しているのはむしろ国立大学病院である事を指摘したい。彼等は生き残りのために必死の努力を展開

しており、臨床医が集まるどのような場所においても耳にするのは独立法人化対策とその為の経営方針の変革、徹底した実績優先主義の展開についてであった。もう一つのシビアに考えねばならぬ問題は国立大学の統合再編の動きである。少子化のため不要な大学教育機関が今後多数輩出することから、非活性化を強調した。関東の私立大学病

院の経営状況をきくつてみると、この実績評価に関して色々な方策がとられている事に気付いた。驚くのは診療部門別の評価のみならず、個人レベルでの評価が厳しく行われる雰囲気である事だ。通常の会社経営では当たり前の職員のリストラから、実績に合わせた給与の傾斜配分まで様々な経営努力が行われているようである。医療界への市場原理導入が叫ばれる今日、福大病院の発展維持は評判の良い実力医師、患者を集め得る有能医師を中心とした診療体制を如何に早く確立するかに尽きるように思う。

医学教育の充実も勿論重要であるが、無能な医師が優れた医学教育を実践できるわけが無い。また優秀な医学生は優秀な病院、医師を慕って集まってくるものである。現在、病院が抱える最も大きな問題は新外来棟、新病棟の建設と現病院内部施設のリニューアルであろう。この構想が以前から取り沙汰されながらも進展に時間がかかる一つの理由として、病院経営の実態が医学部以外の大学関係者に理解されにくい点があるようである。しかし歴代病院長および臨床各部門の尽力によりこの数年は単年度に力をつけている。黒字収支が得られる状況が続いており、他大学に優るとも劣らぬこの経営努力が何と評価されるよう切実に願う次第である。その為にも重ねて実績重視とその正当な評価を強調したい。それでは具体的にどのような評価し、その評価をどのように生かしてゆくべきであるのか。この評価システムの確立が現在の我々の課題であり、いづれ各部門の皆様にも具体的な内容を検討いただきたいと考え

平均在院日数の短縮化(現在約二十一日)、ベッド稼働率のアップ(現在約九十一%)に努力するだけでなく、一刻も早い全面的院外処方への切り替えが望まれる。(三)については出来る限り優秀な本学出身者を病院に多数残すためにも、各々が卒後教育の具体的な内容(研修以後)を明示し提供する必要がある。そして院外研修の為の拠点病院造りに全力を注がねばならぬ。以上我々には多数の難問が突きつけられているが、希望とくじけない意志を持って対応して行きたい。全職員の方々が睿智とパワーを結集してこの難局に対処していただく事をひたすら願う次第です。

筑紫病院の現状と将来構想

福岡大学筑紫病院院長

森 園 哲 夫



福岡大学執行部の関係者は勿論、福岡大学医学部教授会のメンバーにさえも、筑紫病院は赤字病院であり、福岡大学の経営基盤を弱体化する要因であると漠然と信じている方が多数を占めると考えられます。現実には、それは大きな間違いです。筑紫病院は平成十二年度は黒字でした。本年度も経営収支の

黒字が予想されています。黒字になった大きな要因は、前院長の八尾恒良先生が平成十一年から小児科病棟を縮小しての医療費改定の影響、耐用年数を超えた築紫病院では何時建物の破損事故や人身事故が起つてもおかしくないことなどが、現時点での病院長としての大きな懸念材料です。

増加も見られるようになってきました。黒字傾向はこのまま続くと考えられますが、本年四月から筑紫病院の現状と題してこの病院のミゼラブルな現状について切々と訴えておられます。そして、平成十年二月十六日の医学部二二第三十六号では前

学会二二第三十六号では前病院長の八尾恒良先生が福岡大学筑紫病院の現状と将来への期待と題して病院への大学当局のご理解とご協力を切にお願いし

ておられます。その中で、『状態は悪化の一途をたどり、恐らく三年後には現在の建物では診療不能の状況に陥りかねないのが現状です』と述べておられるのが印象的でした。三年後と言うのは既に昨年のことです。私が病院長就任後の二ヶ月間にも、大きな地下埋設水道管の破損事故、屋内床下の湿熱パイプの断裂事故があり、そのたびに大きな修理費が必要となっています。いずれも、パイプの老朽化によるものです。その場凌ぎのつぎはぎ修理ではどうしようもない事態に立ち至っていることは明白です。診療不能という事態が発生する前にハードウェアに

対する大学当局の適切な対応をお願い申し上げます。一方、ソフトウェアの面で、医師、看護職員、パラメ

は、医師、看護職員、パラメ

計って急性期特定病院加算の獲得を目指しています。

将来、医学部当局との対話と改善が必要とされると思われま

新風

平成13年10月1日付けで昇格された方に自己紹介をしていただきました。

内科学第二助教授 松永 彰



一九八〇年福岡大学医学部卒業。同年より荒川規矩男先生の第二内科に入局。研修医を経て一九八二年より福岡雄治先生の主宰する第一生化学にて大学院の四年間を過ごしました。生化学では黒木政秀先生のもとで、モノクローナル抗体の作製などを勉強させていただきました。大学院修了後、第二内科に戻り一九八

六年秋より、米国テキサス州ダラスにあるサウスウエスタン・メディカルセンター生化学教室Dr. Cottamのもとにリサーチフェローとして約二年半留学。留学中にはプロスタグランジンを中心とした仕事をいたしました。一九八九年に帰国後は、第二内科のリポ蛋白研究室に所属し、高脂血症や動脈硬化に関するアポリポ蛋白の研究を中心に、遺伝子変異に関する研究や動脈硬化の研究を行ってきました。アポEの研究では当時東北大学医学部におられた斎藤喬雄先生(福岡大学第四内科)や及川眞一先生(日本大学代謝内科)との共同研究でリポ蛋

白系球血症の原因となるアポE変異の解析に関わることができました。二〇〇〇年四月より朔啓二郎先生が第二内科(循環器科)の主任教授に就任され、内科再編後の新しい体制のもと二〇〇一年四月より医局長を務めています。趣味は旅行とパソコンです。朔

耳鼻咽喉科学助教授 原田 博文



出身は山口県美祿市です。

昭和五十七年に防衛医科大学校を卒業し、昭和五十九年より自衛隊福岡病院に勤務するとともに、福岡大学の研究生となり、私と福岡大学の縁が始まりました。平成六年に、曾田教授、加藤教授のご指導により、嗅覚刺激による脳波変動に関する研究で学位を取らせていただきました。平成九年度から福岡大学医学部耳鼻咽喉科の併任講師として、福岡大学耳鼻咽喉科教室にお世話になっております。平成十二年度から講師、十三年十月より、助教授を拝命することになりました。年々教育や臨床の責任が重くなり、身の引き締まる思いです。

趣味はゴルフですが、最近では忙しくて、なかなかコースに行けません。ハンディキャップも、ここ六年くらい十二のままです。同じ趣味の先生は、是非さそってください。今後、学生や後輩の指導、耳鼻咽喉科教室の発展のために、努力していきたいと考えております。皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしく願っています。

心臓血管外科講師 森重 徳継



昭和五十八年福岡大学を卒業後、浅尾学前教授時代の福岡大学心臓血管外科に入局しました。人工心肺・補助循環等の人工臓器に魅力を感じていたこと、父親が胸部外科医であったことが入局の動機であったかと思えます。研修終了後は大学院にすすみ、手術時の人工心肺業務のかたわら、心保存に関する研究で学位をいただきました。また平成三年より一年間はベルギーのLeuven大学に留学、心筋保護および補助循環の研究を行いました。帰国後も心筋保護の研究をしばらく行っていました。平成八年四月より大村市立病院心臓血管病センターに赴任、教室の先輩の今田先生のもとで、第一線の現場で多くの症例を経験しました。平成十二年十月より大学にもどり、現在にいたっています。

趣味は映画・絵画鑑賞、鉄道模型などインドア派です。鉄道模型の趣味歴は三十年以上になりますが、大村赴任中の拘束生活でさらにはまってしまい、旧国鉄時代のSL等の真鍮製バラキットをこつこつ半田付けで組立てております。臨床での手先の器用さと忍耐力を養うことには多少役だっているようです。さて入局当時と比較すると当科の年間手術例数は三倍以上に増加しており、忙しい毎日です。ご指導を、精一杯頑張っています。

教室紹介

産婦人科学

当教室は昭和四十八年四月の開講から本年で二十八目を迎えます。初代教授は前任の白川光一教授(現名誉教授)であり、現在は二代目に当たられる瓦林達比古教授が教室を主宰されています。教室は教授二名、助教授一名、講師三名、助手五名でスタッフを構成しています。医局員数は現在四十六名でそのうち大学勤務者が二十三名、大学院生四名、研究生二名、留學一名、学外出張が十六名を数えます。教育面では現在四年次に「産科婦人科学」三十二コマ、六年次に「総括講義」八

コマを担当しています。「産科婦人科学」の講義には五名の非常勤講師の先生方の講義も含まれています。五年次のベッドサイドラーニング(BSL)では学生一人一人を主治医につけるクラークシップ制を取り入れて、実際の臨床現場の雰囲気十分に体験出来るように努力しています。診療面で特筆すべきは、福岡県の総合周産期母子医療センターに認定されていることで、産科・小児科・小児外科がひとつのユニットとして福岡地区の周産期医療の中心的役割を担っています。産科病棟には母体・胎児集中治療室が設けられており、母体要因、胎児要因を問わず、全てのハイ

リスク妊娠例に対して最先端の医療を提供しています。また婦人科領域では大学病院という性格上、市内市外から多くの婦人科悪性腫瘍患者が紹介されて来ますので、手術、化学療法を含めた悪性腫瘍に対する集学的治療も積極的に行っています。近年は患者様のQOLも考慮した入院を必要としない外来化学療法も取り入れていきます。腹腔鏡下手術や子宮鏡下手術などの内視鏡下手術も国内トップクラスの症例数を有しております。また内分泌関係ではART(生殖補助医療技術)を含めた不妊診療、中高年外来、思春期外来などの特殊外来診療など、女性の一生にわたる健康維持に教室一丸となって取り組んでいます。研究分野では瓦林達比古教授のライフワークである子宮平滑筋の収縮弛緩機構の電気生理学的研究、最近

注目を集めているアドレノメジュリンの研究、抗エストロゲン剤の子宮内膜に対する効果などの病理学的研究、悪性腫瘍の血管新生に関する研究、受精卵の膜イオン電流の解析など周産期医学、婦人科腫瘍学、婦人科内分泌学の全ての領域で活発な研究を続けています。近年少子化問題が取り沙汰され、また外科系は体力的にハードであるとの印象が強いせい、卒業生の中で産婦人科を志望する人が少なく、全国的に産婦人科医の不足が問題となっています。しかし生命の誕生に接する唯一の科であり、やり甲斐は非常に大きなものがあると自負しております。

(文責 井上善仁)

教室紹介

泌尿器科学

高齢化社会を迎え、泌尿器科の守備範囲はますます広がってきました。私が昔、感じた泌尿器科の特徴は、①生命に関わる領域であること、②発展途上であること、③確かな診断技術があること、④自分で病巣の摘出が可能で、心保存に関する研究で学位をいただきました。また平成三年より一年間はベルギーのLeuven大学に留学、心筋保護および補助循環の研究を行いました。帰国後も心筋保護の研究をしばらく行っていました。平成八年四月より大村市立病院心臓血管病センターに赴任、教室の先輩の今田先生のもとで、第一線の現場で多くの症例を経験しました。平成十二年十月より大学にもどり、現在にいたっています。

趣味は映画・絵画鑑賞、鉄道模型などインドア派です。鉄道模型の趣味歴は三十年以上になりますが、大村赴任中の拘束生活でさらにはまってしまい、旧国鉄時代のSL等の真鍮製バラキットをこつこつ半田付けで組立てております。臨床での手先の器用さと忍耐力を養うことには多少役だっているようです。さて入局当時と比較すると当科の年間手術例数は三倍以上に増加しており、忙しい毎日です。ご指導を、精一杯頑張っています。

高年齢化社会を迎え、泌尿器科の守備範囲はますます広がってきました。私が昔、感じた泌尿器科の特徴は、①生命に関わる領域であること、②発展途上であること、③確かな診断技術があること、④自分で病巣の摘出が可能で、心保存に関する研究で学位をいただきました。また平成三年より一年間はベルギーのLeuven大学に留学、心筋保護および補助循環の研究を行いました。帰国後も心筋保護の研究をしばらく行っていました。平成八年四月より大村市立病院心臓血管病センターに赴任、教室の先輩の今田先生のもとで、第一線の現場で多くの症例を経験しました。平成十二年十月より大学にもどり、現在にいたっています。

趣味は映画・絵画鑑賞、鉄道模型などインドア派です。鉄道模型の趣味歴は三十年以上になりますが、大村赴任中の拘束生活でさらにはまってしまい、旧国鉄時代のSL等の真鍮製バラキットをこつこつ半田付けで組立てております。臨床での手先の器用さと忍耐力を養うことには多少役だっているようです。さて入局当時と比較すると当科の年間手術例数は三倍以上に増加しており、忙しい毎日です。ご指導を、精一杯頑張っています。

教室の主な取り組みを紹介しましょう。伝統の第一は、癌の治療と全般的な外科療法へのチャレンジです。中でも膀胱全摘に伴う尿路変向術の改善をテーマとして取り組んできました。一九七四年当時、先駆けて尿路変向患者さんの福仁会を発足し、QOLの向上を支援してきました。

第二は大島一寛教授のライフワーク・小児泌尿器科です。泌尿器領域の先天異常はとて多いのですが、小児を



ますので、教育・研究まではいと考えております。ご指導よろしくお願ひ申し上げます。

(文責 有吉朝美)

第46回福岡大学医学会例会報告

日 時 平成14年3月27日(水) 17時から
場 所 医学部臨床大講堂

【司会】 編集幹事 黒木 政秀 先生

I 開会の辞

II 会長挨拶 医学部長 満留 昭久 先生

III 福岡大学医学紀要第28巻優秀論文賞授与式

受賞者 三好 恵 先生 (筑紫病院内科第一)

北原 潤一 先生 (精神医学)

IV 受賞論文の要旨講演

講演1 座長 諸江 一男 先生 (筑紫病院内科第一)

Intra-atrial Potential Differences between Therapy with Pilsicainide and Spontaneous Terminations in Patients with Paroxysmal Atrial Fibrillation

三好 恵 先生 (筑紫病院内科第一)

講演2 座長 西村 良二 先生 (精神医学)

The Influence of Stress Coping on Mental Health in University Students (First Report)

北原 潤一 先生 (精神医学)

V 閉会の辞



優秀論文賞受賞者三好氏(中央)、北原氏(右から2人目)を囲んで

『親心・子心(23)』

医学部五年生 二之宮 信也

現在、私はM五の学生である。そして今年の三月一日にBSLが終了した。良き職員にも恵まれたこともありこの一年間は、私にとってとても有意義なものであり、楽しいものであった。BSLでは多くの患者さんに接することができ、分からないことは指導医の先生に丁寧に教えてもらうことができた。それに班のメンバーで話し合いながら勉強することで、お互いの知識を深め合うこともできた。とても感謝している。

次にBSLに関して疑問に思った点についていくつか指摘しておきたい。まず、一週間の期間の科において、一つの疾患をテーマとして与えられたり、患者さん一人を担当させられたりした場合である。そのような場合は一週間かけて与えられた義務をこなさなければならぬ。そのため、患者さんに行う問診や診察も、レポートのためのものになってしまう。レポートという形でまとめることは大切であるが、そのことだけに追われて一週間が過ぎいくのもむなしい気がする。

次に、BSLの目標がつかみにくい科が多い点である。主治医について見学や診察をするのはとてもためになるが、特に科ごとに実習のポイントが決まっているわけではなく、主治医に任されているため目標が漠然としていた。例えば、消化器内科では知っておくべき最低限の疾患を一覧にして与えてくれたおかげで、目標を持つて勉強しやすかった。最後に、BSL試験と評価の仕方についてであるが、これがいまいちはつきりしていない。最終的な試験もBSLで培ったものより、教科書で学ぶことのできる内容を問うものが多かった。試験内容と

しては、いまいちBSLに則していないと思った。この一年間の評価のされ方がどうであるか、私は知らないが、試験だけで評価するのであればそれはよくないのではないだろうか。

今年は私たちも六年になる。学生として残された時間は本当に僅かなものになった。最後のこれから一年を、私は自分の大切な友人たちと一緒に頑張っていきたい。卒業も国家試験も一緒にクリアしていきたい。今、福岡大学では国試の合格率があまりよくないのは事実であるが、それぞれが切磋琢磨していけば結果はついてくるものだと思う。

学位取得

次の方は、平成13年10月9日付けで、福岡大学より医学博士を授与されました。

(論文提出による学位取得)

川崎 千香	病理学第一研究生
緒方 賢司	第一外科医員
奥田 博紀	内科学第五研究生
高山 昌紀	内科学第四研究生
大和 浩り	学外者
熊川 みど	内科学第一助手
廖 少希	外国人研究員
王 立興	外国人研究員
小川 正浩	学外者
古賀 勉	歯科口腔外科学研究生

受賞名 JIMSA (日本国際医学学生団体) 主催

2000年度 BMC (Basic Medical Conference) 優勝

◆内容

The consequence of the c.868G>A mutation of the interleukin receptor common gamma subunit (γ c) gene in the pathogenesis of X-linked severe combined immunodeficiency (XSCID) is an aberrant splicing
小畑 さやか チャン ダニエル コヒラ

私ども二人は、廣瀬先生を始め小児科の皆様のお力添えもあり、発表に漕ぎ着けました。



半年間の実験中はずうまいかないことばかりでしたが、廣瀬先生を始め小児科の皆様のお力添えもあり、発表に漕ぎ着けました。

(ESSは前年に引き続き、小児科での研究でBMC二連覇となりました。)

受賞者の声

BMCとは与えられたテーマに沿った基礎実験を学生自ら行い、その結果を英語でプレゼンテーションして、成果を競いあうものです。評価は単に英語能力に対して行われるのではなく、研究を通じた問題解決や明確なプレゼンテーションもその採点対象になります。今回のBMCのテーマが免疫でしたので、先天的な免疫異常であるXSCIDの基礎研究を小児科でさせていたことになりました。半年間の実験中はずうまいかないことばかりでしたが、廣瀬先生を始め小児科の皆様のお力添えもあり、発表に漕ぎ着けました。

この間の苦労は学生生活の中で貴重な体験となりました。始める前は、研究や英語によるプレゼンテーションは、私達にとって非常にレベルの高いものと不安でいっぱいでした。しかしながら、最後まで続けられたこと、またその結果、こうして優勝できたことは私達にとって大きな喜びであり、また自信となりました。紙面を借りてお世話になった小児科の皆様にお礼申し上げます。

第28回医学部慰霊祭

第二十八回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、御遺族並びに御来賓の方々、本学教職員と学生約三〇〇名が参加し、平成十三年十月二十日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された二十九柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた九一柱、合わせて百二十柱でした。

献灯献花の後、厳肅な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、池原征夫医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位と教職員と学生約三〇〇名がそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されたとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて百二十柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の

崇高な御意志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できまよう努力することを誓い致します。』と新たな誓いを披瀝されました。

